

王子製紙関連社史及び文献案内

このリストは渋沢史料館企画展「渋沢栄一と王子製紙株式会社」の関連情報として実業史研究情報センターが作成したものです。
http://www.shibusawa.or.jp/museum/special/pdf/2013_bunken.pdf


【社史】

「詳細」欄の矢印のアイコンをクリックすると、ウェブ・ブラウザが起動して「実業史研究情報センター・ブログ」の「社史紹介（速報版）」エントリーが表示されます。↓

会社名	『社史名』（ページ数）	出版年	解題	詳細
王子製紙 (株)	『王子製紙社史 第1～4巻、附録篇』（5冊）	1956-59	渋沢栄一らの尽力で1872年(明5)設立出願、翌年創業した抄紙会社は後に王子製紙となり、当初より近代製紙技術を採用し発展。1933年(昭8)富士製紙、樺太工業を合併し、生産量は国全体の8割を占めるまでに成長する。戦後1949年(昭24)過度経済力集中排除法の適用により苦小牧製紙、十条製紙、本州製紙の3社に分割される。創業から分割までの歩みを記した社史は全4巻と附録篇からなる。第1巻は創業から日清戦争まで、第2巻は日露戦争前後、第3巻は大正期から昭和前期、第4巻は太平洋戦争前後、附録篇には明治期創業の製紙会社21社の小史、紙業年表、紙業統計を掲載。各巻に詳細な写真目録と人名索引付。[著者成田潔英(なりた・きよふさ、1884-1979)は王子製紙元社員で紙の博物館初代館長]	
	『王子製紙解体余聞』（143p, 図版, 表）	1958	第二次大戦後1949年(昭24)王子製紙が解体された経緯を、同社社長中島慶次(なかじま・けいじ、1894-1973)らに経済誌記者葉袋進(みない・すすむ)が取材してまとめた著作。トピックごとの25章からなり、当初GHQが要求した9分割案を最終的に3分割にとどめた会社首脳陣の働きを記録した。『日刊東洋経済』での連載を本にしたもので、王子製紙元社長藤原銀次郎(ふじわら・ぎんじろう、1869-1960)と前首相で東洋経済新報社社長石橋湛山(いしばし・たんざん、1884-1973)が序文を寄せている。巻末追録に解体経緯を記した王子製紙文献管理委員会記録と、抄紙会社から解体に至る王子製紙の系譜概要と図を掲載。	
	『王子製紙南方事業史』（650p, 図版, 地図）	1964	1933年(昭8)の合併で国内最大の製紙会社となった王子製紙は、1941年(昭16)太平洋戦争勃発後に軍部の要請で南方地域へ進出。マレー半島、スマトラ、ジャワ、フィリピン、ニューギニア等の地域に工場を建設し、抄紙機械と技術者・工員計400名以上を送り込む。現地人も採用し現地の木材で生産開始するが、1945年(昭20)の敗戦で全ての工場を喪失する。南方事業史は各地に派遣された社員約40名から原稿を集め、7つの地域ごとに工場建設から帰還までの状況をまとめたもの。本文中に派遣された人々や現地の写真を取り込み、巻末に人名索引付。	
	『製紙業の100年：紙の文化と産業』（347p, 図版[8]p）	1973	紙幣類や新聞・書籍用の国産洋紙製造のため、渋沢栄一らの尽力で1873年(明6)抄紙会社が誕生。後に王子製紙と改称し近代技術を導入して発展する。本書は創業100年記念に、旧王子製紙が戦後3分割されて誕生した王子製紙(当初は苦小牧製紙)、十条製紙、本州製紙の3社が共同出版したもので、4つの部分からなる。「紙と文化」では紙の役割を歴史的にたどり、「製紙業100年のあゆみ」では明治以降の近代的製紙業の発達と変遷を記述。「製紙業をきざいた人びと」では製紙業の発展に関わった40人を取り上げ写真と共に業績を紹介。「現状と将来の展望」と題した座談会では3社社長が忌憚なく論じている。巻末に資料付。	
	『王子製紙山林事業史』（595p）	1976	明治初頭より製紙業を経営した旧王子製紙の山林事業を体系的にまとめたもの。原料の調達と製造からなる製紙事業のうち、森林資源を原料として供給していく山林事業の発展が、安定経営に不可欠であった。本書は第1部総説で本州から北海道、樺太はじめ海外に広がった旧王子製紙の山林事業を地域ごとに概観した上で、業務機構の変遷を記述。第2部各説では会社の創設期、成立期、発展期、合併期、戦後の1949年(昭24)旧王子製紙解体までと時代順に事業の推移を記述し、最後に伐採と並行して行ってきた造林事業に触れる。戦後の解体で発足した王子製紙、十条製紙、本州製紙3社の共同編集で、巻末に編集委員会、共同執筆者、資料提供者・協力者名を掲載。	
	『王子製紙社史：戦後三十年の歩み』（645p, 図版4枚）	1982	敗戦後占領政策により1949年(昭24)旧王子製紙は3社に分割される。その中の苦小牧製紙は、新聞用紙の単一品種生産ながら最大規模であった苦小牧工場を引き継ぎ発足。旧王子製紙の伝統を継承し、1952年(昭27)王子製紙工業、1960年(昭35)王子製紙と改称。外地引揚者の受入や大規模労働争議等の問題を克服し、全国に工場を建設。海外にも進出して業界首位の製紙会社に発展する。苦小牧製紙発足からの30年史は6編に渡って沿革を詳述し、巻末に資料編を付す。『王子製紙社史』（1956-59）と同様の装丁。[1993年(平5)神崎製紙を合併し、新王子製紙(株)となる]	
	『王子製紙社史：1873-2000. 本編・合併各社編・資料編』（3冊）	2001	1873年(明6)創立の王子製紙は戦後3分割される。苦小牧工場を引き継いで1949年(昭24)発足した苦小牧製紙は、近代化を進め経営環境の変化に対応して発展。王子製紙工業、王子製紙、新王子製紙と変遷後、本州製紙との合併により1996年(平8)三たび王子製紙となる。苦小牧製紙発足から50年を記念して発行された社史は、本編・合併各社編・資料編の3冊からなる。本編は30年史(1982)以降の20年に重点を置きつつも、創立からの足跡を通史として記述。合併会社編には北日本製紙、日本パルプ工業、東洋パルプ、神崎製紙、本州製紙の各社史及び、本州製紙に合併した5社の社史を収録。資料編には業界統計も含めた各種資料を掲載。[2012年(平24)持株会社制に移行し王子ホールディングス(株)と改称][社史本編は全文がDNP「社史の社」サイトで公開されている]	

会社名	『社史名』 (ページ数)	出版年	解題	詳細
王子製紙 (株) 苫小牧 工場	『五十年の歩み : 1910-1960』 (154p)	1960	1873年(明6)創立の王子製紙は1904年(明37)新工場建設地を求めて北海道へ進出、支笏湖周辺に理想的な土地を発見。まず発電所を建設し、1909年(明42)に苫小牧工場建物落成、翌年から操業開始。近代設備で新聞用紙を生産する。50年史は工場施設、原木を切り出す原野、発電所、製品の積出港、工場の様々な出来事や従業員の生活などを写真で綴っている。巻末に年表付。	
	『王子製紙苫小牧工場創業100年のあゆみ : スエズ以東にかかる大工場なく、日本製紙界に一大改革を起こす』 (135p)	2010	洋紙の国内自給を目指して1910年(明43)操業開始した王子製紙苫小牧工場は、最新鋭の設備導入と技術革新で世界最大の新聞用紙工場として発展する。100年史は操業開始からの歩みを時代順に7章で綴り、多くの図版やエピソードを本文中に取り入れている。巻末に資料付。	
樺太工業 (株)	『真岡工場要覧』 (11, 8p, 図版5枚)	1925	輸入に頼っていたパルプの国産化を目指し、大川平三郎(おおかわ・へいざぶろう、1860-1936)は原料木材と燃料石炭の豊富な樺太に1913年(大2)樺太工業を創立。泊居(とまりおる)工場に続いて1924年(大13)恵須取(えすとる)工場も操業し、両工場合わせ年間8万トンのパルプを生産する。一方で上質洋紙生産を目指し1919年(大8)真岡工場を操業。模造紙、印刷用紙、半紙など年間4千万ポンド(約2万トン)を生産し国内やアジア各地で販売。行啓記念として刊行された真岡工場要覧は、小冊子ながら沿革と現況を写真・図表入りでわかりやすく記述している。[1933年(昭8)王子製紙(株)に合併]	
神崎製紙 (株)	『神崎製紙の歩み』 (276, 46p, 図版11枚)	1971	幕府開成所に学んだ真島襄一郎(1852-1912)は1894年(明27)大阪淀川の支流神崎川にのぞむ地区に真島製紙所を創立。後に野田製紙、富士製紙を経て1933年(昭8)王子製紙に吸収される。戦後1948年(昭23)王子製紙から分離独立し、神崎製紙創立。アート紙を生産していた神崎工場を中心に発展する。真島製紙所創立から書き起こした社史は7章からなり、巻末に資料。[1993年(平5)王子製紙と合併し新王子製紙(株)となる]	
十条製紙 (株)	『十条製紙社史 : 自昭和二十四年八月至昭和四十八年五月』 (258, 55p, 図版11枚)	1974	1873年(明6)に発足した王子製紙は戦後の過度経済力集中排除法により1949年(昭24)苫小牧製紙、十条製紙、本州製紙の3社に分割。十条、釧路、小倉など7工場と研究所を引き継いだ十条製紙は堅実経営で業績を伸ばす。1960年代から森林開発や清涼飲料販売など経営を多角化、1968年(昭43)には東北パルプを合併し規模を拡大。海外にも進出して発展する。王子製紙発足100年を機に編纂した十条製紙のこの社史は、王子製紙の略史を含めた会社発足のいきさつから書き起こし、会社発展の歩みを簡潔にまとめている。本文中に図表を載せ、巻末に資料付。[1993年(平5)山陽国策パルプと合併し日本製紙(株)となる]	
本州製紙 (株)	『本州製紙社史』 (4, 16, 467, 19, 3p, 図版11枚)	1966	1949年(昭24)過度経済力集中排除法により旧王子製紙は3社に分割。本州の7工場を引き継ぎ本州製紙が発足、高級板紙や上質紙を主力とする。1957年(昭32)北海道釧路地区に新鋭工場を建設し、産業用ダンボール原紙を製造。成長度の高い製品に重点を置き、合理化を進め発展する。社史は本社編と工場編からなり、本社編には発足からの歩みを6章に記述。工場編には釧路工場はじめ全国8工場および関連会社5社の沿革を載せている。[1996年(平8)新王子製紙と合併し、王子製紙(株)設立]	

【関連文献】

著者(発行所)	『書名』 (ページ数)	出版年	解題	詳細
[参考図書] 成田潔英著 (製紙記念館)	『洋紙業を築いた人々』 (2, 9, 373, 15p)	1952	渋沢栄一はじめ明治以降日本の製紙業を築いた人々約50名について、略歴、写真、エピソードをまとめたもの。『王子製紙社史』(1956-1959)編纂過程で収集した資料に基づき、直接本人に取材した逸話も含む。附録に「日本洋紙業小史」を載せ、巻末に人名索引付。著者成田潔英は製紙記念館(後の紙の博物館)初代館長。続編として、紙の博物館第5代館長長谷川正一がその後活躍した18人を取り上げ、『洋紙業を築いた人々・続』(紙の博物館、1990)を刊行。更に紙の博物館新館完成を機に、両書をそれぞれ文庫サイズにおさめた復刻版が刊行されている(紙の博物館、1998)。	
[研究書] 四宮俊之著 (日本経済評論社)	『近代日本製紙業の競争と協調 : 王子製紙, 富士製紙, 樺太工業の成長とカルテル活動の変遷』 (x, 314p)	1997	1873年(明6)の王子製紙創業に始まる近代日本の製紙業の歩みを、経営史の側面から研究したもの。第1部「近代製紙企業の成長と競争」では、代表的な有力企業であった王子製紙と富士製紙を取り上げ、それぞれの創業と成長のプロセス、そして競争関係の推移を実証的に解明している。さらにその競争関係に後から参入した樺太工業についても触れ、最後に1933年(昭8)の3社大合同の経緯を述べる。第2部「有力製紙企業による協調行動」では、同業者団体そしてカルテル組織であった日本製紙連合会による、製紙企業間の一般洋紙分野での協調行動の推移や効果を追う。一方で新聞用紙分野の共販機関であった共同洋紙会社の共販活動の推移と効果にも論及している。そして競争と協調の結果3社大合同に至ったと結論付けている。本書は著者の学位論文を書き改めたもので、巻末に人名・事項索引付。	